

# 富士見町遺跡第6次発掘調査報告書



2006

名古屋市教育委員会

## 例 言

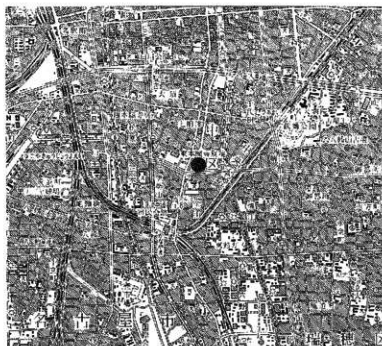
1. 本書は、名古屋市中区大井町211番1・211番2で実施した富士見町遺跡第6次発掘調査の報告書である。
2. 調査は、会社事務所建設工事に伴って実施し、対象面積は150m<sup>2</sup>、期間は平成17年9月26日から同年10月21日までであった。
3. 発掘調査に関わる事前の調整事務は名古屋市教育委員会文化財保護室が行い、現地調査は、名古屋市見晴台考古資料館が実施した。現地調査の担当者は同館学芸員深谷淳、水野裕之である。本書は、同館学芸員野澤則幸、村木誠、齋藤茂の教示を得て水野が執筆した。
4. 本書で用いる水準値は、東京湾平均海面（T. P.）、平面図の座標は、国土地理院第VII系（世界測地系）によっている。
5. 調査の記録、出土遺物等は見晴台考古資料館で保管している。
6. 発掘調査および報告書の作成にあたり、下記の方々にご教示、ご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

（株）マルダイスプリンク 大井建設（株） 青木修〔（財）瀬戸市埋蔵文化財センター〕  
後藤太一〔（株）パスコ〕

## 目 次

1. 位置と環境	2
2. 調査の経過	2
3. 調査の成果	3
3-1 基本土層	3
3-2 遺構と遺物	6
(1) 包含層の出上遺物	6
(2) 近世・近代の遺構と遺物	7
4. まとめ	9

〔表紙写真：調査地を南方からみる〕



調査位置 (S=1/25000)

## 1 位置と環境

富士見町遺跡は、熟田台地（更新世層）の中央部東端に位置し、東側の谷の斜面にまたがった遺跡である。その範囲は、南北約700m、東西100～200mにおよび、今回の調査地点は遺跡の南端部にあたる。市教育委員会では、これまで5地点の発掘調査を行なっていて、弥生時代末頃～古墳時代初頭頃の方形周溝墓の溝や、奈良～平安時代の竪穴住居跡等の遺構のほか、包含層からは弥生時代中期中頃や後期の土器、古代から中世の陶器が多く検出されている。また、当遺跡近くには、織田信長の父信秀が築き、居城した古渡城跡（戦国）がある。

## 2 調査の経過

名古屋市教育委員会文化財保護室は、当遺跡地内での会社事務所建築計画に伴う調整の結果、文化財保護法の上旨に則り事業者の協力を得て、旧建物基礎の掘削部分等の除去掘削（地表下約1.5mまで）を立会調査のもとで行なったのち、平成17年9月26日から10月21日までの予定で名古屋市見晴台考古資料館による発掘調査を行なった。発掘調査区は、建築基礎形状に応じて大きく3箇所に分かれた（A～C区とした合計150m<sup>2</sup>）。また、建築工事の関係から掘削深度の制限があったため、A区の遺構の一部（SK03）は完掘していない。

出土遺物は、1層と呼ぶ包含層中から5cm前後の破片となった弥生時代～中世の土器、陶器が多く出土した。また、上坑等（K-1、2など）には明治～大正時代頃の陶磁器類が多量に含まれるものがあり、すべてを採取していない。出土遺物は、現場作業の時点でコンテナ3箱分であった。



図1 遺跡と調査地点（1～6次）

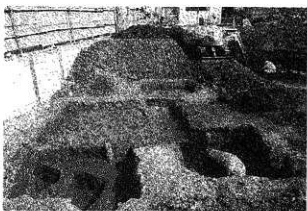


写真1 調査区（A区）

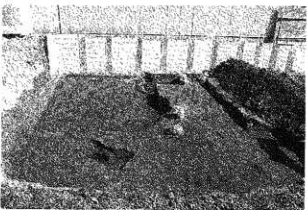


写真2 調査区（B区）

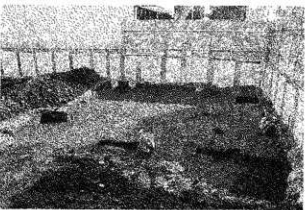


写真3 調査区（C区）

### 3 調査の成果

#### 3-1 基本土層

本来の堆積層が残る部分から復元すると、地表下約120cmまで近代の陶磁器類を含む暗灰褐色上層等が堆積し、これ以下約20cmまでの中世陶器片を含む灰茶褐色土層と、さらに約30cmまでの主に弥生時代～中世の土器、陶器片を含む暗灰褐色、黒褐色上（上層因の1層）の包含層となっている。以下には人工造物が無く、約10cmの黄土色砂シルト、約70cmの泥炭質土層、さらに礫混じりの黄白色シルト（熟田層か）である。

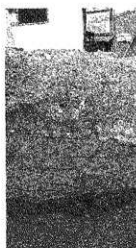


写真4 B区北壁（部分）



写真5 C区南壁（深掘部分）

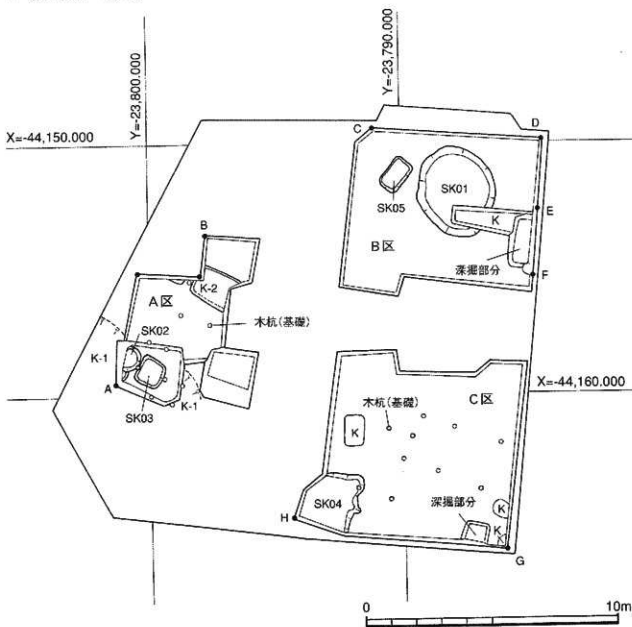
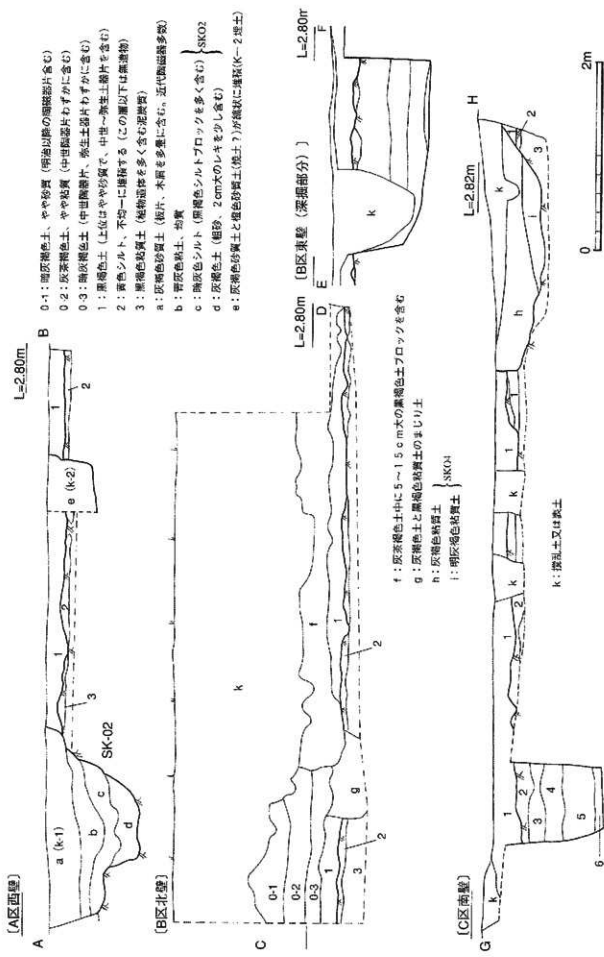


図2 調査区平面図 (S=1/150)



- 0-1: 暗灰褐色土、やや砂質 (明透以鉄の塊状部を含む)
- 0-2: 灰茶褐色土、やや粘質 (中世微礫片むすかに含む)
- 0-3: 暗灰褐色土 (中世微礫片、赤生土部むすかに含む)
- 1: 黒褐色土 (上位はやや砂質で、中世~赤生土層片を含む)
- 2: 黄色シルト、不均一に層積する (この層以下は無遺物)
- 3: 黒褐色粘質土 (植物遺体を多く含む泥炭質)
- a: 灰褐色粘質土 (板片、木屑を多量に含む、近代微礫片多数)
- b: 黄灰色粘土、粘質
- c: 暗灰色シルト (黒褐色シルトブロックを多く含む) } SKO2
- d: 灰褐色土 (粗砂、2cm大のレキを少し含む)
- e: 灰褐色粘質土と褐色粘質土(塊土?)が線状に層積(k-2埋土)

- f: 灰茶褐色土中に5~1.5cm大の黒褐色土ブロックを含む
- g: 灰褐色土と黒褐色粘質土のまじり土
- h: 灰褐色粘質土 } SKO1
- i: 明灰色粘質土

k: 探乱土又は熟土

図3 調査区土層断面図 (S=1/4.0)

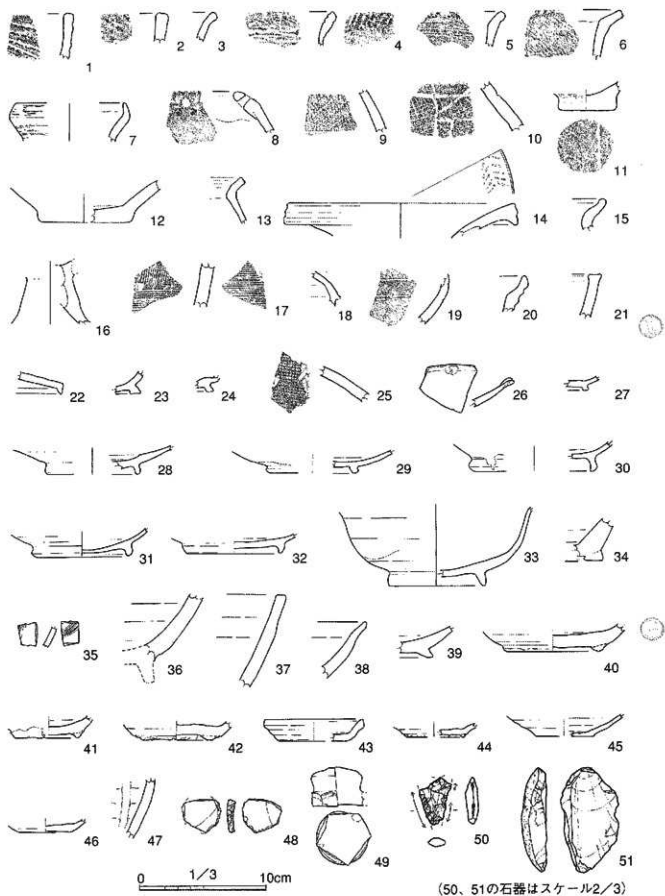


図4 包含層の出土遺物 (表1参照)

### 3-2 遺構と遺物

#### (1) 包含層の出土遺物

今回の調査地点では、中世までの土器、陶器片（10cm以下の破片）を含む遺物包含層が調査区一帯に堆積しており、コンテナケース1箱分が出土した。付近の台地上には数期の遺構も存在していたかと思われる。以下に出土遺物の概要を示し、各時期の主な遺物を図示した。

#### ●縄文・弥生

縄文時代の遺物はごく少なく、晩期の深鉢片と考えられる2点を図示した。弥生時代の土器片は5cm以下の小破片がほとんどであるが、出土破片数は558点で、包含層出土遺物の約78%を占める。時期は中期後半頃から後期後半頃のものがある。石器は2点出土。

#### ●古墳時代～中世

古墳時代では、1点のみ須恵質の埴輪片（17）がある。須恵器には小破片のため古墳時代と古代の区別のつきにくいものがあるが、須恵器片の破片数は41点であり、包含層出土遺物の5.7%である。古代では、猿投窯稲年0-53窯式期以降の灰釉陶器碗、皿の破片が主体で44点出土した。包含層出土遺物の約6.2%を占める。中国青磁（35）は1点のみ出土した。中世では、山茶碗の破片がほとんどで71点出土した。包含層出土遺物の約10%を占める。山茶碗は猿投窯産が多く、瀬戸産、美濃産が少し混じる。他に古瀬戸の破片2点（46、47）と常滑丸胴部片が1点ある。また、経筒外容器蓋の宝珠鈕と思われる無釉陶器（49）が地表採集された。

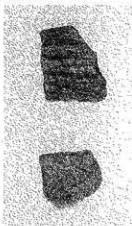


写真6 縄文土器

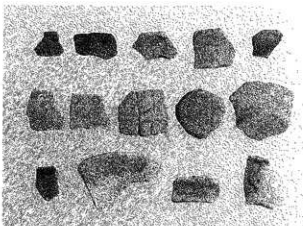


写真7 弥生土器

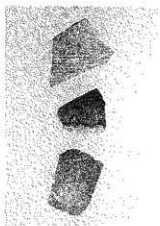


写真8 須恵器

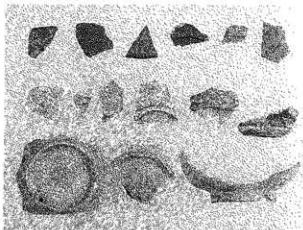


写真9 須恵器、灰釉陶器

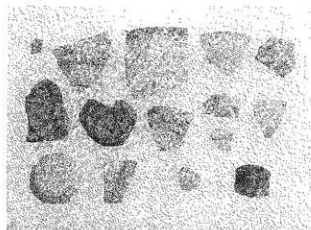


写真10 山茶碗、古瀬戸など

(2) 近世・近代の遺構と遺物

●SK01

長径約5m、短径約4.5mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは約24cmである。埋上には幕末～明治時代の陶磁器と大正時代以降の陶磁器、ガラス瓶等が混じる。

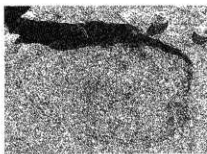


写真11 SK01



写真12 SK01出土品

●SK02

径約1.5mのほぼ円形を呈すと思われるが、西側は調査区外で未掘である。検出面からの深さは約43cmである。明治時代の磁器片、板片等が出土。

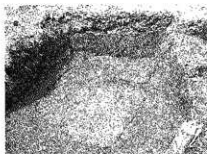


写真13 SK02.03検出状況



写真14 SK02出土品

●SK03

一辺約1.5mの方形を呈する。検出面から約43cmまで掘削したが、制限深度のため以下は未掘である。図示の他にいぶし瓦片がある。18世紀頃の遺構か。



写真15 SK02.03

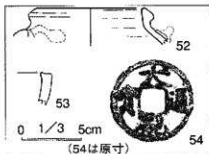


図5 SK03出土遺物

●SK04

C区南壁断面では、上端の幅約2.6m、深さ約40cmの浅い溝状の遺構で、南側に絞く。出土遺物は少なく、図示したほかに加工木片が出土。



写真16 SK04

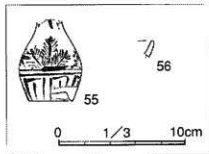


図6 SK04出土遺物

●SK05

短辺1.1m、長辺1.9mのほぼ長方形を呈する。検出面からの深さは、約30cmである。明治・大正時代の陶磁器とさらに時代の下る陶磁器類が混じる。

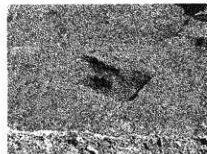


写真17 SK05



写真18 SK05出土品



●その他

A区の南側と北側で表土除去の際に明治・大正時代頃の陶磁器、木製品等の生活用具を多量に含む廃棄物層の範囲が検出された(K-1、2)。規模や形状は、不明確である。K-2の下位は、連山面を掘り込んだ土坑状であった。また、A区とC区では、直径12~14cmの丸太杭群が地山以下まで垂直に打ち込まれた状態で検出され、やや軟弱な地盤に対応した建物の基礎と考えられる。

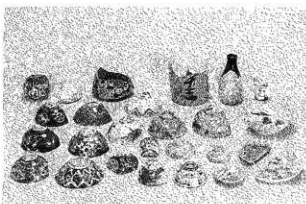


写真19 K-1 出土品

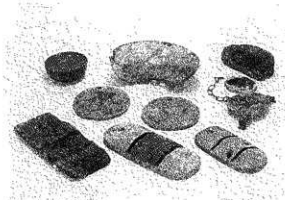


写真20 K-1 出土品

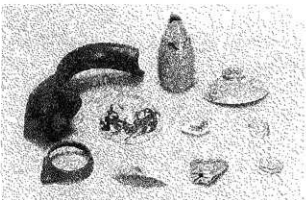


写真21 K-2 出土品

表1 遺物観察表(本書掲載遺物の番号と共通)

図番	器種名	出土位置	遺存部	備考
1	灰土器・漆鉢	1層・横溝	口縁部片	地味、染織文
2	灰土器・漆鉢	C区・1層	口縁部片	地味、染織文、口縁周縁に凹線
3	灰土器・漆鉢	1層・横溝	口縁部片	時期不明、埋没位の粘土、1.3リ以上の漆絵を含む
4	灰土器・漆鉢	C区・1層	口縁部片	中項中葉、口縁内面に凹線工具の刺突文
5	灰土器・漆鉢	1層・横溝	口縁部片	中項
6	灰土器・漆鉢	C区・1層	口縁部片	中項、E田町式
7	灰土器・漆鉢	A区・SKR3	口縁部片	中項、E田町式、外側に無漆文
8	灰土器・漆鉢	1層・横溝	口縁部片	中項、漆成層の凹線と谷状突起のある漆文
9	灰土器・漆鉢	B区・1層	口縁部片	中項、E田町式、軽い染織文と凹線
10	灰土器・漆鉢	1層・横溝	底面片	中項、凹線式高
11	灰土器・漆鉢	C区・1層	底面片	中葉、底面外側に漆文は横
12	灰土器・漆鉢	C区・1層	底面片	中葉か、横溝
13	灰土器・漆鉢	C区・1層	口縁部片	中葉末か発掘初葉
14	灰土器・漆鉢	B区・1層	口縁部片	長溝、凹線式、口縁内面に羽状の刺突
15	灰土器・漆鉢	1層・横溝	口縁部片	後葉、受口状
16	灰土器・漆鉢	C区・1層	口縁部片	後葉、凹線式
17	漆器	C区・1層	胴部片	横溝、灰白色、器内で腐食
18	漆器・環蓋	C区・1層	蓋部欠損	横溝、灰白色
19	漆器・環蓋又は蓋		胴部片	灰色、無漆、凹線式の横溝流漆文
20	漆器・鉢	C区・1層	口縁部片	古代か、灰色、横溝
21	漆器・鉢	1層・横溝	口縁部片	横溝で横溝
22	漆器・環蓋	1層・横溝	口縁部片	有台環の蓋
23	漆器・有台環	C区・1層	高台部片	灰白色、横溝
24	漆器・有台環	1層・横溝	高台部片	灰白色、やや横溝
25	漆器・鉢	C区・1層	口縁部片	相似の横溝式高
26	灰土器・漆鉢	C区・1層	口縁部片	横溝で横溝、灰白色、凹面に淡緑灰色の輪
27	灰土器・漆鉢	C区・1層	高台部片	横溝で横溝、灰白色
28	灰土器・漆鉢	C区・1層	高台部片	凹面に薄く均一な輪
29	灰土器・漆鉢	C区・1層	高台部片	横溝で横溝
30	灰土器・漆鉢	C区・1層	高台部片	凹面に薄く均一な輪
31	灰土器・漆鉢	1層・横溝	底面片	横溝で横溝
32	灰土器・漆鉢	C区・1層	底面片	横溝良好、凹面にやや横溝

図番	器種名	出土位置	遺存部	備考
33	灰燵陶器・虎柄	C区・1層	底面片	虎斑良好、内面に全体に軸
34	灰燵陶器・蛇	C区・1層	高台底片	長頸細口、蛇文は好
35	青磁・瓶	C区・1層	体部片	赤赤、阿波窯系、腰斑良好、緑に淡黄緑灰赤
36	山奈碗・片口鉢	1層・検出	体部片	紫斑、尾形型第3形式
37	山奈碗・片口鉢	C区・1層	口部片	紫斑、尾形型第3形式
38	山奈碗・碗	C区・1層	口部片	紫斑、尾形型第3形式
39	山奈碗・碗	1層・検出	高台片	紫斑、尾形型第4～5形式
40	山奈碗・碗	C区・1層	底面片	紫斑、尾形型第3形式後半、内面にスズ状の付着物
41	山奈碗・碗	C区・1層	底面片	赤赤、尾形型第3形式
42	山奈碗・碗	B区・1層	底面片	紫斑、尾形型第7形式
43	山奈碗・小皿	1層・検出	小片	紫斑、尾形型第7形式
44	山奈碗・碗	C区・1層	底面片	尾形型第9形式
45	山奈碗・碗	C区・1層	底面片	未定形第11形式
46	古瀬戸・折縁小皿か	C区・1層	底面片	底面外周以外は黄緑色後
47	古瀬戸・壺	C区・1層	胴部片	虎斑良好、内面に淡黄緑色の胎痕あり
48	灰燵陶器	C区・1層	底面片	紫斑山奈碗片を加し
49	経路入り器等?	表土採取	器の完形部か	紫斑、胎土は淡黄灰赤で緻密、円筒状に器形を加下か
50	石碁・石碁	1層・検出	碁部片	→石碁、石碁の碁用か、碁盤部に使用時の汚れ
51	石碁・碁片	C区・1層	碁部	下口石碁系碁片の碁盤部片
52	陶器・鉢類・土器	SK03	口部片	瀬戸窯産品、18世紀
53	土師器・内子碗	SK03	口部部	茶室、惣文や不鳥
54	貨幣・「大塚浄室」	SK03	貨幣	北条氏（1107年初編）
55	磁器・小瓶	SK04	口部欠部	厚白楽付磁器、18世紀末～19世紀初葉
56	磁器・碗	SK04	口部小片	肥田磁器か

#### 4まとめ

富士見町遺跡は、名古屋城から熱田神宮を結ぶ南北に細長い熱田台地上に位置している。標高10m以上の台地上のこれまでの発掘調査地点からは、弥生時代から古代、中世の遺構が検出されている。遺跡西側にあたる古流域跡の発掘地点（標高9m前後）でも、遺構は検出されていないが弥生時代中期、後期の土器片や埴輪片のほか、古代、中世には上坑や井戸などの遺構が検出されている。

今回の調査地点は、平地をつくる熱田層の形成後、旧精進川などにより侵食されてきた南東へ下がる谷へ移行する低位の地形に位置するためか、近世以前の遺構は検出されなかった。付近の標高は約3.8mである。調査したC区の深掘調査地点では、標高1.5mあたりでチャート礫を含む黄白色礫層が検出され、これが上層部分を削られた熱田層の検出面と考えられた。第3次調査地点（1985）の花粉分析報告によれば、この向より上に堆積していた無遺物の泥炭質シルト層からは、ハシバミ属、ツガ属等の花粉が検出され、その構成が寒冷な古気候を示すと考えられるなどとし、完新世より古い更新世の堆積層としている。この泥炭質シルト層の上に形成された遺物包含層（土層同の1層）は、遺物の属する時期が縄文、弥生～中世までの混在した緩い斜面堆積層となっている。出土遺物の内容は、これまでの当遺跡の発掘調査地点で検出された遺構や遺物群の時期と矛盾していない。遺物の検出されない時代や時期については、付近での生活が希薄だったことを示すのであろうが、当包含層の形成過程については、明確な説明ができていない。

なお、当調査地の西200～400mほどのあたりは、古流域が天文13年（1543）に築城された場所とされているが、今回の調査地点では、包含層中および表土層中に16世紀代の遺物が無かったことも注意されよう。

近世では、当地北側が「不二見ヶ原」と呼ばれた東方を望む台地端にあたり、武士や商人の別荘もあった。また、西側では、真宗大谷派名古屋別院（双別院）が元禄15年（1702）に名古屋御坊本御堂を完成させ、享保17年（1732）には、付近に藩主徳川宗春の振興策によって「不二見遊郭」が開設された。これ以降、店屋や宿屋などが集まった場所であったと思われる。調査地点では江戸初期の遺構、遺物はわずかであったが、明治時代後半以降の陶磁器類を含む廃棄土坑が多くつくられていた。また、時期は不明確ながら、おそらく近世、近代の建物基礎と考えられる丸太杭群が検出された。

引用・参考文献

- 名古屋市見晴台考古資料館 1983 『中区富士見町所在 富士見町遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育局  
委員会
- 名古屋市見晴台考古資料館 1983 『富士見町遺跡第2次調査の概要』名古屋市教育局委員会
- 富士見町遺跡調査会 1985 『中区大井町所在 富士見町遺跡発掘調査概要報告書』富士見町遺跡調査会
- 伊藤正人 1992 『富士見町遺跡第4次発掘調査の概要』名古屋市教育局委員会
- 野澤則幸 2002 『富士見町遺跡第5次』『富士見町遺跡第5次・白川公園遺跡第4次  
一中区内における共同住宅建設に伴う発掘調査一』名古屋市教育局委員会
- 大浜良介 2004 『富士見町遺跡発掘調査報告書 一集合住宅建設に伴う遺跡発掘調査一』(株)二友組

## 報告書抄録

ふりがな	ふじみちよういせきだいろくじはつかつちようさほうくしよ							
書名	富士見町遺跡第6次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
編著者	水野裕之							
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館							
所在地	〒457-0026 名古屋市南区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052-823-3223							
発行機関	名古屋市教育局委員会							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°'〃	°'〃			
富士見町遺跡	名古屋市中区 大井町211番 1・211番2	23100	7-18	5度 8分 50秒	136度 54分 32秒	2005. 9. 26 ? 2005. 10. 21	150m <sup>2</sup>	会社事務所 建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
富士見町遺跡		弥生～中世	包含層	弥生土器、須恵器、 灰釉陶器、山茶碗		近代の上坑が多い		

### 富士見町遺跡第6次発掘調査報告書

2006年3月31日

編集 名古屋市見晴台考古資料館

発行 名古屋市教育局委員会

印刷 株式会社 名古屋大気堂

